

## 離反への第一歩

——小林秀雄における横光利一の欧州体験の位置——

中井祐希

第一九回研究会でのラウンドテーブル「横光利一と小林秀雄」での議論を受け、本稿で考えてみたいのは、「機械」〔『改造』一九三〇・九〕により異常接近した両者がなぜ離反せざるを得なかったのかという点である。当日の基調報告者である井上明芳は、既存の文学状況との断絶を含蓄していた「純粹小説論」〔『改造』一九三五・四〕と日本の私小説との接続を試みた「私小説論」〔『経済往来』一九三五・五一八〕という視点から、同じく綾目広治は、通俗小説を志向していた横光と認めようとしなかった小林との差異から捉えようとしていた。両者とも一九三五年に発表された「純粹小説論」やそこででの問題意識の違いが離反の原因にあったという見取り図を示していたが、しかし後述するように「純粹小説論」以降も小林は横光に対し期待をかけていた。一九三六年以降の小林の横光評価や、当日のデイスカッションでも話題に挙がっ

たフランス文学との影響関係を視野に入れ、「機械」という交点以後、離れ始めていく両者の第一歩目を検討していきたい。

\* \* \*

「機械」以降、小林秀雄が関心を向けていた横光利一の小説を挙げるとすれば、「紋章」〔『改造』一九三四・一一九〕がそれに該当するだろう。ここで注目したいのは、小林が「機械」の延長線上に「紋章」を位置づけている点にある。「紋章」の欠点は、旺盛な発明力にともなふ空虚なる饒舌にある。愛すべき雁金の姿を虚構だといふのではない、彼は「機械」の主人公が、氏のなかではんたうに育つて来たものだ。「紋章」は、作家が自分の観念を長篇中の人物として意識的に人間化しようとした、恐らくわが国で最初の企てである〔「紋章」と「雨風強かるべし」とを読む』『改造』一九三四・一〇〕。

熱のこもったかつての「機械」論（「横光利一」『文芸春秋』一九三〇・一一）とは異なり、小林は「紋章」の欠点を指摘しつつも、日本の文学状況に対する横光のチャレンジングな姿勢に一定の評価を与えている。このような小林の横光評価は、「新しい外来の意匠に対して常に貪婪であり鋭敏で悪びれる事になかつたが為に、（中略）生れて日の浅いわが国の近代文学が遭遇した苦痛の象徴」と評した「私小説論」にも受け継がれている。小林にとって横光はまさに「可能性において現代の表現者」（森本淳生）小林秀雄の論理——美と戦争』人文書院、二〇〇二・七、152頁）だったのである。

一九三六年の横光の欧州体験に対しても、小林は期待をかけていた。例えば、横光の渡欧直前の座談会（「横光利一渡欧欲送会」『文学界』一九三六・四）において、小林は「俺は横光利一欲送派」だと支持を表明する。そして、「実生活をひきずらないで生活を一ケ年できるといふこと、——しかし非常に強い刺戟の中でね、——生活できるといふことは、これは実にチャンスだよ」と発言している。小林の同時期のエッセー「井の中の蛙」（『文芸懇話会』一九三六・三）にも、同様の記述が確認できる。

今度横光利一といふ蛙が一匹ほんたうの洋行をする。実にうらやましい事だ。正宗白鳥氏は洋行して、洋行したつてちつとも豪くなんぞならない事を発見したさうで

あるが、豪くなんぞならなくても、見聞が広まればよいのである。（中略）僕が横光氏に望むところは一言に尽きる。こんな言葉があるかどうか知らないが、出来るだけ意識的にEducation sensationnelleといふべきものをやつて来て貰ひたい。頭で得られるものは、こつちに居たつて得られる。たゞ僕等井の中の蛙どもが羨望するところは、洋行者の感性上の豊富なる与件である。さういふ感性上の与件の操作にかけては、横光氏は独特な（資質に恵まれてゐる人だ。（中略）Education sensationnelleなら外国にゐても出来る、いや外国に行つてはじめて満喫できる御馳走かも知れない。恐らくこの御馳走には実生活の味が無い、それだけ新鮮なものがあるわけだ、言はば仮構された生活のなかに、澆刺たる刺戟が得られるわけだ。

この二つの文章を約言すれば、横光の洋行への小林の期待は、欧州体験という「実生活」から半ば強制的に切り離された、つまり「仮構された生活」の中で作家横光利一がどのよう「感性の発展」（Education sensationnelle）を遂げ、帰国後の文学活動に繋げていくかにあった。また、「実生活」という用語や横光との引き合いに正宗白鳥を出している点から、同年に行われた「思想と実生活」論争の影響をここから読み取ることできるだろう。

しかし、実際の横光の欧州体験は、小林の期待に込められるものではなかった。帰国後の座談会〔欧羅巴漫遊問答〕「文学界」一九三六・一一）において、小林は「心で見たり感じたりする事だけを見たり感じたりして来れば沢山だ、といふ具合に廻つて来れば、ああいふ旅行記になるのはよく解るな。あの旅行記は、僕は詰らなかつたけれど、やつぱりちつとも道草を食はず旅をしてゐるといふところは、僕は感服した」と吐露している。小林は渡欧前の言及通り、勉強や視察などではなく横光が「道草を食はず旅をして」きたことを強調しつつも、書かれた旅行記については「詰らなかつた」と評価を下している。では小林は、横光の欧州体験の何が物足りなかつたと判断したのであるか。

ここで参考となるのは、アンドレ・ジツドの「ソヴェト旅行記」である。横光のジツド受容については「純粹小説論」や「紋章」など、もはや指摘するまでもないが、小林にとつても「私小説論」にてジツドを援用して純粹小説論を検討しており、両者の関係を語る上で欠かすことができない作家であつた。このジツドの「ソヴェト旅行記」は一九三七年一月、小松清によつて抄訳という形で『中央公論』に発表された（全訳は一九三七年三月、第一書房から刊行された）。「ソヴェト旅行記」は日本国内においても物議を醸していくことになるのは周知の通りだが、小林はジツドが見たソヴェトの光景や

問題点には目にもくれず、「自分の信するヒューマニティの觀念の前ではソヴェトの現実であらうがこの現実であらうが蒼ざめるべきものは蒼ざめる、といふ思想といふものの象徴的価値に関する彼の文学者らしい信念だ」（ジイド「ソヴェト旅行記」Ⅰ）『東京朝日新聞』一九三七・二・二二）と感服する。小林の「ソヴェト旅行記」への関心はその後も継続しており、「作家たる自分は自分流にものを見る、他人流には見る事が出来ない」こと、「ジイドの信じてゐるものは、自分の見地の普遍性であり「私個人の感想」の普遍的な意義である」（ジイド「ソヴェト旅行記」Ⅲ）『文学界』一九三七・六）と主張を展開していく。小林は、ジツド自身が培つて来た確固たる「私」に対し、高く評価していることがわかる。外的な光景や問題ではなく、内的な「私」へ向けられた小林のこの拘泥は、先の横光の洋行に対する期待とも通底しているだろう。つまり、小林は横光に対し「実生活」から引き離され、また勉強や視察といった目的などを度外視した外国での生活を通して「感性の發展」を遂げ、横光自身の「私」という存在をさらに深化させて欲しかつたといえないだろう。

ところで、横光は前述した帰国直後の座談会で次作の構想を問われた際、「紋章」のインテリの方をバりにやり、続きを書かうかと思つて居る」（『欧羅巴漫遊問答』前掲）と述べ

ている。当初は山下久内を中心とした『紋章』の続編を想定していたのである。しかし、実際は久内ではなく、矢代と久慈という新たな人物を作り出し、「旅愁」を執筆していくことになる。小林にとって、この横光の方向転換は評価できるものではなかった。例えば、「文芸月評XV」（『東京朝日新聞』一九三八・一・八―一二）には、「小説にどういふ思想を盛りうかとか、どんなモラルを探索しようかとかと今日の作家が苦し」んでいる状況を指摘し、その典型的な作家として横光を挙げている。そして小林は「由良之助」（『中央公論』一九三八・二）と「厨房日記」（『改造』一九三七・一）を取り上げ、「この作家は外遊以来混乱した状態」であり、その打開策として「嘗つて「紋章」といふ作で雁金といふ人物に取組んだ様に、また新しい仮装人物を創り出しこれと取組むより外、この作家は今の思想的混乱を整理する事は出来まい」と提言する。

両者の離反の原因がここに示されている。小林にとって、帰国後の横光に求めていたものは、「機械」から「紋章」へと続く方向性であり、横光の欧州体験を横光自身の「私」の発展の契機として期待していたのである。一方、帰国後の横光は、小林の期待とは異なり、「旅愁」を連載し、徐々に思想小説もしくは日本回帰の色合いを強めていくことになる。

しかし、このように考えていくと、興味深いのが「続紋章」

（『改造（時局版）』一九四〇・三―一） ※連載時のタイトルは「紋章」の存在である。紙幅の関係上詳細な検討はできないが、帰国直後『紋章』の続編の執筆を企図していた点、小林が横光の「外遊以来混乱した状態」から脱するため「紋章」のような作品を望んでいた点、「続紋章」が「旅愁」第二篇の終わり頃から第三篇の合間に執筆されている点などを勘案すれば、まさに「続紋章」は、「旅愁」で描こうとした問題を一旦保留にしつつ、渡欧前の『紋章』に立ち帰り、その続きを取り組もうとしたといえないだろうか。たしかに欧州体験以降、横光は小林とは異なる領域に向かって歩き出したといえる。しかし、それでもなお横光にとって小林は絶えず振り向かされ続けた存在だったのである。

※横光利一の引用部は河出書房新社版『定本横光利一全集』、小林秀雄の引用部は新潮社版『小林秀雄全集』（第五次全集）により、旧字体は新字体に改めた。